



Mike SVOBODA マイケル・スヴォボダ (トロンボーン) +
Stefan HUSSONG シュテファン・フッソング (アコーディオン)

トーキョーワンダーサイト music program vol.09

●Anarchic Harmonies

〈曲目〉原田敬子: Luciano Berio and Adriana Hoelszky 〈日本初演〉
フレスコバルディ+ジョン・ケージ: アナーキック・ハーモニー 他

定員50人の贅沢なコンサートであった。JRお茶ノ水駅から徒歩7分のトーキョーワンダーサイトのホールは、天井は高いが長方形の小さな箱。壁に黒を基調とした現代アートが2点、それ以外特別な装飾はない。が、この空間から発信される文化・芸術は多彩。現代アートをはじめ、日本の伝統音楽、ビデオアート、ライブパフォーマンスなど、東京都の芸術創造支援を背景に様々なイベントを企てている。過去の音楽プログラムでは「テオドーロ・アンゼロッチと漆原朝子(バイオリン)」のコンサートも生まれ、「時の深みへ」(細川俊夫) 他を演奏しているのは驚きであった。彼はスカルラッチェ、サティなど数々の作品をアコーディオンで弾き、CDに納めている。



▲型にはまらない、2人の発送と演奏

さて今日のコンサートは、最初にシュテファンが足早に登場し、いきなり暗譜でヘルツキー作曲「High way for one」を弾いた。ピスラート、トレモロ、ペローシェイクなど様々なテクニクを駆使してペローで風をあおり一瞬の隙も与えないその緊張感、のつけからカーテンコールをかっさらった。

続くマイケルのトロンボーンはベリオの「Sequenza V」。「Sequenza・セクエンツァ」は、ベリオ(1925-2003)が半生をかけて書き続けた(1958-2002)傑作にして怪作(?)ということで、最近、完全全曲演奏会(作曲年代順)が東京芸大奏楽堂で行われた。その時に聴いた曲の印象とは全く違うおどけた表が滑稽。トロンボーンの朝顔があちを向きこちを向き、それが立体的演出となって部屋中に音を満たす。作品の意図か、彼の演出か…、いずれにせよ本物を感じさせずにはおかない。

三曲目はDuo。図体の大きい単音管楽器のトロンボーンにアコーディオンは負けるのでは?と、幾分不安な面持ちで注目したが、トロンボーンはちゃんと弱音器でバランスをとり、十分アコーディオンが対応した。若手作曲家・原田敬子の「midstream-(2004)アコーディオンとトロンボーンのための」は日本初演。彼女は「演奏中の奏者にはいろんなことが起こっている。どんなに難しいと思っけていても、音楽に入り込んでしまえばできることもある」と解説した。

2部はなんとバロックのフレスコバルディと前衛音楽のジョン・ケージを交互に繋ぎあわせた「アナーキック・ハーモニー」(無秩序な調和とでもいおうか)。フレスコバルディ「Canzona」とジョン・ケージ「Harmony」の2作品を彼らなりの趣向で紡ぐ。教会音楽の荘厳さと、ジョン・ケージにしてはあまりに素朴な和音の対比が現代と古典の対話的でもあり、何故か、退屈さをしのぐ上手い演出効果を発揮した。「そうだ!音楽はこのように自由なんだ」と、型にはまらぬ彼らの発想にいたく感動した。

それにしても一曲毎にカーテンコールされたこのコンサートが発するオーラ。やはり贅沢なコンサートなのだ。

〈11月8日(月) トーキョーワンダーサイト 1階ギャラリー〉

川口裕志